

学期末を迎えて夏休みも間近になってまいりました。日ごろの教育、研究活動を視点を変えて概観する格好の機会であるシンポジウムを8月に控えました。そろそろ発表の準備を始めた方もいらっしゃると思います。2014年のシンポジウムは3年ぶりに European Association for Japanese Studies 国際学会の一分科会として、スロベニアのリュブリャーナで開催されます。本52号はスロベニアにおけるシンポジウムを中心にお届けします。実りの多い成果を期待してリュブリャーナでお目にかかりましょう。

## 第18回 日本語教育国際シンポジウム リュブリャーナにて EAJS 国際学会の一分科会として

### シンポジウム特別講演のご案内

ヨーロッパ日本語教師会会長

いよいよ来月「日本語教育における言語と文化の仲介」をテーマにリュブリャーナで2014年度ヨーロッパ日本語教育シンポジウムが開催されます。今年は前日の27日にもリュブリャーナ大学と共催で「グローバルな日本語教育のために」という会を持ち、李在鎬先生から遠隔日本語教育についてお話を聞き、シンポジウム前日に日本語教育に関心のある方が集い交流する場を設けることになりました。

基調講演の西山教行先生はもともとフランス語教育学や言語政策をご専門になさっていますが、近年、広く外国語教育や言語政策などについて研究され、『ヨーロッパ言語共通参照枠』の意義や複言語・複文化主義の日本での受容や展望についても執筆、講演をされご活躍されています。基調講演では、日本語だけの議論にとどまらず、広い視点から複言語主義と言語教育の目的についてお話してください。特別講演では、「複言語」を演劇というかたちで実践されている劇団らせん館劇の代表である嶋田三朗氏にお話していただき、招待パネルでは言語と文化の仲介に直接かかわる Translation Studies の専門家の方々からお話を伺います。

本ニュースレターには、基調講演をしてくださる西山教行先生、特別講演の劇団らせん館の嶋田三朗氏、招待パネルをまとめてくださる佐藤＝ロスベアグ・ナナ先生、27日にお話してくださる李在鎬先生が記事を執筆してくださいました。

### 言語的多様性、他者性への招き

#### 基調講演

京都大学

西山教行(にしやま のりゆき)

人はなぜ外国語を学ぶのだろうか。母語だけで暮らすことはできないのだろうか。母語とは「母のことば」であり、「母なることば」でもある。

しかし、これは母のことばであるとは限らず、父のことばであることや、またいずれのことばでもない場合もある。さらに、母語は一つとは限らない。二つ、さらに三つのことばを身につけて育つこともある。とはいえ、人が母語を身につけると、そこに選択の余地はほとんどない。ところが、外国語、正確に言えば、「異言語」を学ぶときには、何語を学ぶのか、なぜ学ぶのか、何を目的として学ぶのかなど、われわれはさまざまな問いをみずから、また他者に投げかけることができる。もちろん、これには選択の余地のないケースもあった。かつての社会主義政権下での東欧でロシア語は必修であり、軍国主義の日本に領有されていた台湾や朝鮮半島における日本語も同様の運命をたどってきた。

日本は、英語以外の言語を、中等教育段階からほとんどといってよいほど学習することのない世界でも稀有な国であるため、言語選択という難題は子どもたちや親を悩ませない。外国語選択という経験は、多くの場合、大学入学時となるのだが、近年は英語以外の第2外国語を必修科目として課さない大学が増えているために、日本人が主体的に外国語を選択する機会はますます減っている。市民社会は言語学習の社会的政治的意義を十分に認識することがないため、言語学習について学ぶ機会は決して多くない。しかも、そのわずかな機会さえも、親や兄弟の学習体験、さらにはメディアによる不用意な情報に翻弄されることもある。

ここ数年来、日本政府は隣国との政治的関係を緊張させることによって政権への求心力を高める傾向が強くなり、またインターネットに市場を奪われつつあるメディアも排外主義をあおることにより市場の確保を図ろうとしているため、隣国との信頼関係が損なわれている。そのため、世論に流される学習者は中国語や韓国語の受講を避ける傾向があるようだ。しかし国際関係の緊張している今こそ、相手国の言語を学ぶべきなのだ。

1960年の冷戦期、また日本が安保闘争に明け暮れる中で、評論家の加藤周一は英語教育をリアル・ポリティックの観点より冷徹に分析し、日本の安全保障のために日米安保を進めるべきか、英語教育を充実させるべきかと問うた<sup>1)</sup>。そして、この時代に必要な外国語

<sup>1)</sup>加藤周一(2009 [1960])「日本の英語教育」『加藤周一自選集』第3巻 岩波書店

は緊張関係にある中国とソ連の言語であり、仮想敵の言語を学ぶべきではないかと反語を重ねている。言語学習は安全保障のかなめともなるのだ。ここには、文化などへのあこがれといった情緒の入る余地はない。

この論調にならば、現在、学ぶべき外国語は韓国語と中国語になるだろう。ただし、かつての冷戦の時代と異なる点は、現在の排外主義は長引く不況の中で、メディアの作り上げたところが大きく、現実の裏付けに乏しいことである。

この一方で、90年代以降のグローバル化に直面した日本社会は、英語能力が日本人にとって基本的属性であるかのような脅迫的な言説を繰り返している。そのため、英語を学ぶ必要性はあまりにも自明なものであるとの認識が人々の頭の中に刷り込まれ、それに対する疑問が私たちの意識にのぼることもあまりない。とはいえ、どれだけ日本人に英語の運用能力が必要であるか。これを正確に把握することなく、メディアの言説に踊らされている消費者にもその責任の一端はあるだろう。90%の日本人に英語の運用能力が不要であると主張する論説は決して極論ではない<sup>2</sup>。

私たちは言語学習の意義に目を向けることなく、どのように効果的に学ぶか、教えるかといった学習法や教授法に関心を注いでしまう。英語は高校や大学入試に、そして今後は中学入試にも組み込まれようとしている。これが学習の主要な動機となり、異言語へと向かう実存を覆ってしまう。そしてひとたび大学に入学すれば、卒業単位に編入されているから必要だ、更に社会人となれば、昇進のために不可欠だなど、私たちは何らかの社会的要請のために外国語学習を意義づけることが多い。

確かに外国語能力が職種に応じて必要となることは否定できない。しかし幸いなことに、日本で外国語能力が必須とされる職業はきわめて少ない。そのためにかえって、日本人は好んで外国語を学び、外国語を使用する職業に従事したいとあこがれるのだが、これは暮らしのためにやむをえず異言語を身につける人々の経験に対する想像力を鈍らせてしまう。

外国語学習をこのような社会制度や必要性の中のみ、閉ざしてはならない。母語以外の言語を学ぶことは何よりもみずからの人間性をひらく営為である。20世紀初めのフランス人作家セガレン(1878-1919)はタヒチや中国など異界への旅に生き、他者の中から自己の文化を、自己そのものを見直す経験を深めた<sup>3</sup>。その中で「エグゾティスム」への思索を深め、他者性の経験を新たにしている。セガレンの省察はフランス文学史に幽閉するにはあまりにも惜しく、言語教育学を挑発する言説に満ちている。

セガレンは、エグゾティスムを観光客の体験する異国趣味から解放し、強烈な個性が客体と衝突し、客体との距離を実感する時に経験する「生き生きとした、それでいて奇妙な反応」と洞察する。エグゾティスムとは他者への迎合や適応ではない。エグゾティスムの経験は旅のみならず、異言語への出会いにおいても現れる。異なる言語文化、他者に対峙するとは、セガレンによれば「永久に理解不可能なものがあることを鋭く直接に知覚する」ことである。異言語学習は単なる

単語の置き換えや、また相手への同化でない。この時、言語文化に内在する他者性は永久に他者であることをやめず、私の外部に存在する多様なものは単一なるものへと還元されることはない。この多様なものは私を分裂させるものではなく、「宇宙全体でもって限りなく豊かにする」ものなのだ。セガレンにならば、異言語との邂逅の中で味わう他者性こそが言語学習の根幹を構築するものであり、自分とは何であるか、何でないのかを発見させる契機となるのだ。セガレンは、このようにして異文化との相克の中に「フランスなるもの」の解体とそこからの脱出をくわだてた。この経験は異言語学習の極北を示唆するものであり、他者の中に内在する「永久に理解不可能なものがある」ことへの賭けにほかならない。

ではどのような言語文化の中に、この他者性は十全に現れるのだろうか。機能性が高く評価され、受け入れられている言語は道具として広く流通していることから、使い勝手がよく、他者性の発現する媒体となり難いかもかもしれない。なぜなら道具としての言語は母語と変わらぬ論理を構成することができると想定されるためだ。そのため日本社会においては、英語教育・学習を通じて他者性や多様性を経験することは容易ではないだろう。むしろ英語以外の言語によってこそ、他者性や多様性の扉は開かれる。

言語とは扉であり、まなざしに他ならない。日本語とフランス語では、それぞれ見える世界は異なる。たとえばフランス語には「安い」を意味する形容詞がないことや、80を4x20と表記することなど、固有の世界観がこめられている。そしてこのような論理の違いこそが、解決不可能な他者性や文化の多数性を一瞬であろうとも、垣間見せる要因なのだ。

言語は道具であると共に、道具ではない。この二律背反の世界に存在を開くためには、英語以外の言語を学び、新しい世界へのまなざしを持つことが重要だ。学校教育の中で英語以外の外国語には少ない学習時間が配置されていることから、そこから見える世界はごく小さく、マイクロコスモスの散歩にとどまるかもしれない。異なるまなざしから世界を見る体験は、世界が自分の理解できない事象から構成されており、異文化が複層的であり、「永久に理解不可能なものがある」ことを発見させてくれるものだ。

言語教育の目的をすべて功利主義に還元しないこと、世界の複層性や他者との出会いに向けたまなざしを持つ、ここに21世紀の言語教育の鍵があるのだ。

#### プロフィール:

西山教行(にしやま のりゆき)

京都大学大学院人間・環境学研究科外国語教育論講座教授、日本フランス語教育学会副会長、日本言語政策学会副会長、国際フランス語教授連合理事(アジア太平洋委員会委員長)。専門は、言語政策、言語教育学、



フランス語教育学、フランコフォニー研究など。2005年に着任し、それ以来、各種の助成金の支援を得て、多言語主義・複言語主義に関する国際研究集会を開催してきた。2014年4月には国際研究集会「異文化間教育をめぐって:言語文化の教育学と教授法」を開催した。以下では、この国際研究集会の論点を整理し、現在の研究課題の一端を紹介したい。

<sup>2</sup>成毛眞(2011)『日本人の9割に英語はいらない-英語業界のカモになるな!』祥伝社236p.

<sup>3</sup>セガレン 木下誠訳(1995)『エグゾティスム』に関する試論『羈旅』現代企画室、351 p.

これまで日本において、異文化間性はアメリカの言語教育学の影響のもと、主として異文化間コミュニケーションの観点から研究や実践が積み重ねられた。そこでは、日本文化とアメリカ文化が本質的に異なると考えることから、日本人とアメリカ人とのコミュニケーションには誤解や摩擦が発生し、それをいかに克服するのか、つまり二項対立の文化衝突の解決を目指す技術として考察が進められてきた。現在でも、言語文化を共有しない場において発生する「問題」を解決し、コミュニケーションをより円滑に行いたいとの誘惑は言語教育の現場から消え去ることはない。これは、文化を固定的に、また本質主義の立場からとらえる立場であり、文化を単純化し、強いてはステレオタイプを生み出し、偏見や差別を助長する要因にもつながりかねない。

2014年の国際研究集会では、異文化間能力に着目し、異文化間性の多様性や複層性を喚起した。この能力は「ヨーロッパ言語共通参照枠」の提起した複言語・複文化能力を源泉とするもので、「参照枠」は異文化間能力という用語を直接に用いていないが、その概念に言及し(5.1.1.3)、複文化能力は異文化間性を包摂することが示唆されている。

ヨーロッパの文脈で論議されている異文化間性とは、異言語話者間のコミュニケーションの齟齬を解消することにとどまるものではない。文化とは複層的なものであり、社会のみならず、個人の内部にも複数の文化が共存し、その承認や尊重こそ、民主的社会の発展に重要であると訴える。これはコミュニケーションの技術である以上に、異なる他者との共生に開かれた原理であり、寛容への招きである。

グローバル化の加速と共に、現代社会はいつそう複言語化し、多文化化しつつある。異文化間の自由な往来は社会的次元のみならず、個人の内部においても頻度を増している。

言語教師は個別言語や文化の殻に閉じこもり続けるのだろうか、あるいは共生の扉を開くのだろうか。

<http://www.momiji.kyoto-u.ac.jp/~nishiyama/>

<http://dhatena.ne.jp/jnn2480/> <http://twitter.com/jnnnishiyama>

## 招待パネル

### 日本における言葉の複数性と翻訳

イーストアングリア大学

佐藤(さとう)=ロズベアグ・ナナ

光栄なことに、リブリーナーで8月に開催されるAJEのシンポジウムで招待パネルをオーガナイズすることになった。私の専門は Translation Studies (以下TS、「翻訳学」という翻訳語はあえて使わないでおく)、その中でも文化翻訳と呼ばれるものである。本パネルに参加してくれる田辺希久子氏の専門は翻訳教育で田辺氏は英日仏日の翻訳家でもあり、アングルスジェフリー氏は日本文学を専門とする日英翻訳家である。パネルの主な目的はTSがいかに言語教育に貢献できるのかを考えることにある。

そこで、今回は、主に翻訳の話をすることにしたい。「翻訳」というと、ある「国語」(または言語)で書かれたテキストを他の「国語」(または言語)に移すことだと(それも時には機械的に!)考える人がまだまだ少

くないのではないだろうか。特に日本で英語教育を受けて、高校や大学受験を経験してきた人にはこの傾向が強く、翻訳といういわゆる逐語訳を思い浮かべる人も多いかもしれない。しかし、現代のTSでは、いわゆる逐語的な等価はほとんど存在しないことを前提に議論が進められている。

おもしろい例をあげてみよう。かつて、アイヌ言語民族学者に知里真志保(1909-1961)という人がいた。知里氏の本を読んでいて大きな衝撃を受けたことがある。それは「氷」という言葉のアイヌ語訳についての解説であった。「氷」をアイヌ語では「ルプ(とけるもの)」と言うそうだ。日本語の氷は、凍っていないのが常態であることからできた言葉であり、アイヌ語の場合は、凍っているのが常態であることからできた言葉であることから、このような違いが起きるということであった。自分の第一言語につきすぎているとこの視点の違いに気がつかない。この語の翻訳を試みると「ルプ」は「氷」となるのだろうが、しかし、ただ「氷」と訳してはその含意については伝えることができないと知里氏は指摘している。この視点は翻訳という営みを行う上で、重要である。翻訳を行う際には、ただ、言葉を置き換えるだけでは、十分ではないことが多いのである。

話が飛ぶようだが、もっと大きなことに話を広げてみたい。これらは哲学者が語っていることであるが、すべての人間がすでに誰かが話し書いたことをもとに話して書いている、ということである。これは、すべての人間が剽窃をしているという意味ではない。人間は生まれた時には言葉を使えないし、もちろん書くこともできない。親や家族、隣人や学校など社会の中で徐々に言葉を習得するのである。これらの習得した言葉たちはすでに誰かが使っていた言葉であり、それらは教えられ、読み聞かせられて学んだもので、「無」から学んだわけではない。知識も同様である。そういう観点から考えれば、人間が発している言葉や書いたものは常に誰かからの引用と考えることが可能で、これらも、また翻訳という作業なのである、と。

別の例をあげれば、素晴らしくおいしいショートケーキを食した時に、「おいしい」とまずは味覚で感じ、それを言葉で「おいしい!」と表す。転んでけがをすれば、まず痛いと感じ「痛い」と叫ぶ。感じたことを言葉にして表す。おおげさに言えば、すべての人間のこのような営みが翻訳と言えなくもないというわけである。

私がこのような大きな話をここでしているのは、翻訳と聞くと、「逐語的なテキスト翻訳」や「文法の翻訳」といったものだと考えがちで、多くの「日本人」が共有している既存の翻訳概念を壊したいからである。この概念にとらわれていては言語教育において翻訳を教える際に、自分たちが日本の学校で受けてきたような「逐語的な等価」という幻想の世界を新たに学生に教え込むことになってしまう。また、そのような翻訳教育は言語教育においてコミュニケーションが鍵概念として浮上し、翻訳教育が衰退した1970年代以前に後戻りをするだけになってしまうからだ。

さて、翻訳教育と言えば、日本の大学ではその多くが英語の翻訳を教えている。英語以外の言語を扱う場合でも、中国語やフランス語と言うように、国語から国語への翻訳を扱っている。日本には日本語しか存在しなくて、それもその日本語ははるか昔からゆるぎない存在なのだ幻想をいだいている人もいるかもしれない。しかし、「日本語」という標準語が人為的に作られはじめるのはほんの少し前、明治のころであったし、日本には共通語以外にも多くの言葉が存在している。さ